学習院女子短期大学紀要　第34号　1996.12.25

人物埴輪の意味するもの

増田美子

一、はじめに

古墳に形象埴輪が樹立されるようになった時期は、大形の前方後円墳出現と相前後する四世紀後半頃のことである。この頃の築造とされる奈良県左紀陵山古墳では、その後円墳頂部に家形埴輪と蓋形埴輪・盾形埴輪が立てられていた。同時期の畿内の古墳からも、家形埴輪や盾形埴輪等が出土しており、ほぼこの時期に家や特殊器財形の埴輪が立てられ始めたようである。これらに引き続き、五世紀半ばから後半にかけて、動物埴輪や人物埴輪が樹立されるようになった。動物埴輪は、鳥・馬・猪・犬・鹿・牛・猿・魚等であるが、人物埴輪は、男女貴人・武人・馬飼・鷹飼・鳥飼・楽人・舞人・力士・農民・子守像からさらには生殖器を露出した男女像まで様々のバリエーションを持ったものが出現している。

これらの人物埴輪樹立の意味については、現在までのところ、以下のような諸説が主張されている。

（1）殉死代用説　『日本書紀』垂仁天皇条の、皇后日葉酢媛命が死去した際に殉死の代用として埴輪を立てたとする記述を史実とするもので、古くはこの説が一般的であった。しかしこれに対しては、日葉酢媛命の墓と目されている四世紀半ばの左紀陵山古墳にはまだ人物埴輪はみられないこと、また、人物埴輪や動物埴輪に先行して家形や盾形埴輪等がみられること、初期の大阪府蕃上山古墳出土の人物埴輪は男女の巫人とされている像と甲冑形埴輪であり、埋葬者の近習者と考えられる貴人男女像ではないということ等から現在は否定的見解が有力となっている。

（2）殯や誄再現説　現在までのところ最も支持の多いのがこの説である。[1] 我が国古代の葬送儀礼の中で重要な位置を占めていたのが殯であり、この期間、妻等は殯宮に籠もり、また遊び部等により酒食等の供奉や歌舞が行われた。これ

らの殯期間に行われた行事と、埴輪群像の姿とは重なる部分もあることは確かである。古墳に立てられた酒を捧げ持つ女性像等は供奉者であり、琴弾きや踊る像等は歌舞を行っているとも考えられる。

しかし古墳は、殯が終わった後に埋葬する施設であり、わざわざ墳墓の側で殯の場面を再現する必要性もなさそうである。また、古代の葬送儀礼において最も重要と思われるのが、「泣く」という行為であることは、『古事記』[2]の伊邪那美命が亡くなった時、夫の伊邪那岐命が、

乃匍匐御枕方、匍匐御足方、而哭時。（上巻火神被殺条）

と、死者の周りを腹這い廻って泣いたという記述や、倭建命の死去に際しても、

即匍匐廻其地之那豆岐田而、哭為歌曰。（中巻倭建命薨去条）

の如く、妻子達がやはり腹這い廻って泣いたという記述からも明らかである。また、このことは殯においても同様であり、『古事記』『日本書紀』[3]の若日子の殯に関する記述にも、

乃於其處、作喪屋而、河鴈為岐佐理持、鷺為掃持、翠鳥為御食人、雀為碓女、雉為哭女、如此行定而、日八日八夜遊也。（『古事記』上巻天若日子条）

便造喪屋而殯之、即以川鴈、為持傾頭者及持帚者、一云、以鶏為持傾頭者、以川鴈為持帚者、又以雀為舂女、一云、乃以川鴈為持傾頭者、亦為持帚者、以鵠為戸者、以雀為舂者、以鷦鷯為哭者、以鶏為造綿者、以烏為宍人者、凡以衆鳥任事、而八日八夜、啼哭悲歌。（『日本書紀』神代下第九段）

の如く、鳥が担当する殯の諸役に「哭人」がおり、八日八夜泣き悲しんでいる。『日本書紀』に記された天武帝の殯記事においても、殯期間には盛んに慟哭・発哀が行われている。このような殯をふくめた葬送儀礼において、重要な役目を果たすと考えられる「泣く」という行為を表現した人物埴輪は皆無である。泣いているどころか、むしろ笑っていたりほほ笑んでいたりする像が存在するのである。

また人物埴輪群像が、殯や葬儀の姿であるとすると、性器露出人物像、猪・犬・猿等の動物埴輪像、狩猟場面を表現したと思われる埴輪像などを立てた説明もつかない。

（3）埴輪芸能論説　この説は、埴輪にはそれぞれ職業集団が表現されており、これらがその職掌をあげて祭式に臨む

状態を描出しているというものである。軍事集団は守る兵杖として、文人集団は容儀を整え、職業集団はその職掌に基づく芸能を奏上する。そして、この埴輪祭式は、首長権の継承儀式であるとするものである。[4] この主張は、多様な人物像の説明としては妥当性もあるが、どうみても首長の墓とは思えない小さな古墳にも形象埴輪は立てられているという点で問題を残している。

（4）葬送行列表現説[5]　戦前からの説である。六世紀後半の造営とされる千葉県山武郡横芝町の姫塚古墳出土の埴輪は、男子像・馬四頭と馬子像四体・武人像二体・琴弾きを含む男子像一四体・女子像七体・鍬を持つ男子像等一〇体が一列に並び、列外にひざまづく男子像という配列であり、これからすると葬送列というのもうなずける。しかし、その他の古墳の埴輪配列の中には、座して酒宴を催していると思われるようなものがみられたり、狩猟場面を表現した埴輪や性器露出埴輪等があり、葬送行列とは結び付かないものが多く出土している。

（5）生前の功業記念説　被葬者の華麗な生前の業績を表現したものとする説[6]であるが、多種多彩な埴輪像の説明としては的を得ているようにも思える。しかしこの説でも、性器露出埴輪等特殊埴輪樹立については、やはり説明がつかない。

（6）神事に伴う饗宴表現説　最近主張された説であり、保渡田八幡塚古墳や塚廻り四号墳・観音山古墳等の埴輪群像は、正月や新嘗祭の祝宴を表現しているとするものである。[7] 確かに群馬県出土のこれらの埴輪群像は、酒宴表現との解釈もできなくはないが、なぜ墳墓の廻りで元正や新嘗祭の酒宴を表現しなければならないのかが不明であるし、また、農夫像や子守像・性器露出埴輪像等樹立の説明もつかない。

（7）死後の世界表現説　高句麗古墳の壁画や中国の明器との関わりで考察し、巫女・覡像とされる正装の男女像は神仙の世界のものとする説である。[8]

このように、埴輪樹立の意味を解明しようと種々の論理が展開されてきているが、問題を含んでいる説が多いことも確かである。古代の人々の埴輪に託した意味を探るには、埴輪にのみとらわれるのではなく、古代人が墳墓に求めたものから追求してゆくことが必要なのではなかろうか。墓には、それぞれの時代の人々の他界観が現れていると考えて間違いないであろう。古墳もまた、三世紀末～七世紀の人々の他界観の表現の一つである。この観点から、人物埴輪樹立の意味に迫ってみたいと思う。

二、人物埴輪樹立の実態

まず、考古学上の成果をもとに、古墳に埴輪が立てられていった様子をみてゆきたい。

形象埴輪の初現と考えられる四世紀後半の奈良県左紀陵山古墳（伝日葉酸媛命陵）では、後円部の頂上を円筒埴輪列で囲み、その中に大型の盾と蓋と家形埴輪が配置されていた。[9] 同時期の奈良県・三重県・京都府・大阪府等の古墳からも、家形埴輪や盾・蓋等の埴輪が出土している。また、同じく四世紀後半築造と考えられる京都府相楽郡山城町平尾城山古墳の後円部からは鶏（鳳凰？）[10] 形埴輪が出土した。

四世紀末から五世紀前半になると、これらの家・盾・蓋に加えて椅子・船・高坏・甲冑・大刀・靫・鞆・翳等の埴輪が立てられるようになり、その地域も畿内だけでなく、岡山県・福岡県・宮崎県・群馬県にまで拡大する。[11] 図1は、この時期の築造と考えられる、京都府庵寺山古墳の後円部墳頂の埴輪樹立の想定復元図である。円筒埴輪列で囲まれた区域の中央部に、家形埴輪が配置され、前面両脇に蓋形埴輪が、そして入り口両脇に盾形埴輪が立てられている。また図2は、五世紀前半の頃と想定される群馬県赤堀茶臼山古墳（全長五九メートルの帆立貝式古墳）であるが、その円頂部中央に家形埴輪が配置され、前面中央部に高坏が、そしてさらにその前面に二脚の椅子形埴輪が置かれ、家形埴輪の左右には蓋か翳の埴輪が立てられていた。そして、帆立貝式のくびれ部分に鶏（鳳凰？）形埴輪が二つ置かれていた。

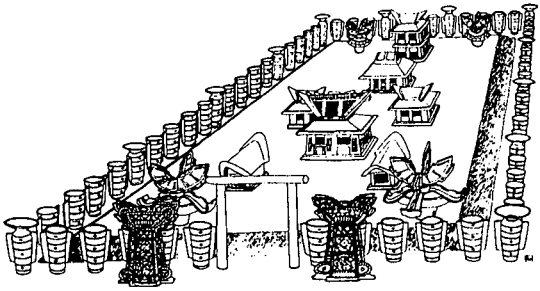

図1　庵寺山古墳　望月幹夫「器財はにわ」より

このように、初期段階で立てられていた形象埴輪は、鳥・家等と各種器財埴輪であるが、この他に古墳に立てられたものとして種々の木製品がある。それらは鳥形・蓋形・盾形等であるが、これらの木製品は円筒埴輪列の中に立てられたものもあれば、円筒埴輪列の外側に立てられたものもあるようである。[12]

明確な形での人物埴輪の初現は、大阪府藤井寺市の蕃上山古墳に立てられた襷を掛け

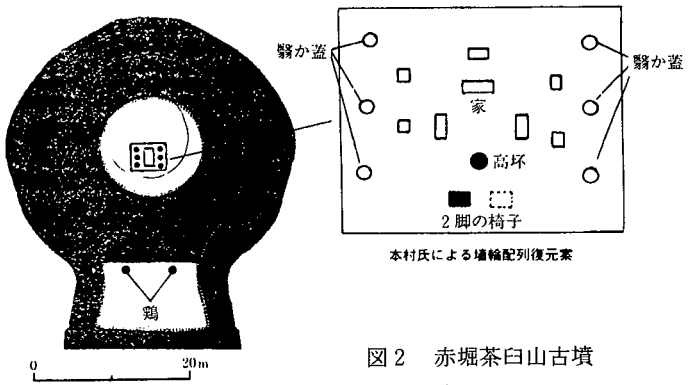

図2　赤堀茶臼山古墳

群馬県立歴史博物館『はにわ－秘められた古代の祭祀』より

た男女像・弓を持つ武人埴輪像等六体の人物像である。また、同時にこの古墳からは家・蓋・盾・甲冑形埴輪も出土している。この古墳は、応神天皇陵の西側に築造された全長五三メートルの帆立貝式古墳である。五世紀半ば～後半頃の築造とされているものであるが、残念ながらこれらの埴輪の樹立場所については確証はない。同時期のものと思われる福島県安達郡本宮町の天王壇古墳からも、家・盾・蓋・甲冑形埴輪とともに、女性像と鶏（鳳凰？）・馬・犬・猪等の動物埴輪が出土しており、これらは径三八メートルの円墳の造り出し部分に配列されていたようである。[13]

このように、畿内・九州・関東、あるいは畿内・東北という地理的に離れた地域に、同時期に同種の埴輪が出現するということは、既にこの時期の日本列島では、単なる文化交流だけでなく、埴輪製作技術者の移動が行われていた可能性を示唆している。

多数の形象埴輪の群像配列の復元が種々試みられており、図3は、群馬県保渡田八幡塚古墳の人物・動物埴輪配列の復元図である。この古墳は五世紀末の築造と考えられる全長一〇二メートルの前方後円墳であり、埴輪群像は、この古墳を囲む堤上の、円筒埴輪列で囲まれた区画の中に配置されていたものである。中央部分の第八区には、椅子に座った男子像二体と、これと相対した形でやはり椅子に座った女子像二体、その脇には杓の入った壺と女子半身像が一体配置されており、この後には短甲をつけた武人群さらには文人群が並ぶ。そして、その前の中央部には女子半身像・裸馬・鷹飼・猪飼が並び、左右にはそれぞれ飾馬・裸馬と馬飼達、鶏・水鳥が配置されていたとするものである。この整然とした埴輪列から、水野正好氏は、埴輪芸能論を主張されたのであるが、この埴輪の数と復元位置に対しては疑問の余地もあるようである。[14] 図4は、六世紀前半のものと考えられている群馬県太田市の塚廻り四号墳の埴輪配列図である。

この古墳は全長二二、五メートルの帆立貝式古墳であり、墓壙のある円形墳頂部の円筒埴輪で囲まれた中に家形埴輪と盾形埴輪が配置され、円筒埴輪列の外に大刀形埴輪さらには盾形埴輪が置かれている。人物埴輪等は、墳のくびれ部分から先の方形部分に立てられており、最前列に大刀を佩した女子像、その後に杯等を持った三体の女子像、さらにその後に椅子に座った男子像とそれに向かってひざまづいた男子像、その後あるいは横に男子像二体と飾り馬二頭という構成である。図5は、埴輪の終末期と考えられる六世紀後半の群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土の埴輪配列図である。この古墳は全長九四メートルの前方後円墳であり、人物埴輪は、後円部の横穴石室入り口付近の中段テラス部分に一列に配置されていた。石室入り口の左右には盾形埴輪が立てられ、円墳墳頂部には家と鶏（鳳凰？）形埴輪が、また前方部墳頂部にも家形埴輪が置かれている。さらに、前方部テラス部分には多数の馬とともに馬子・鷹飼も配置されていた。

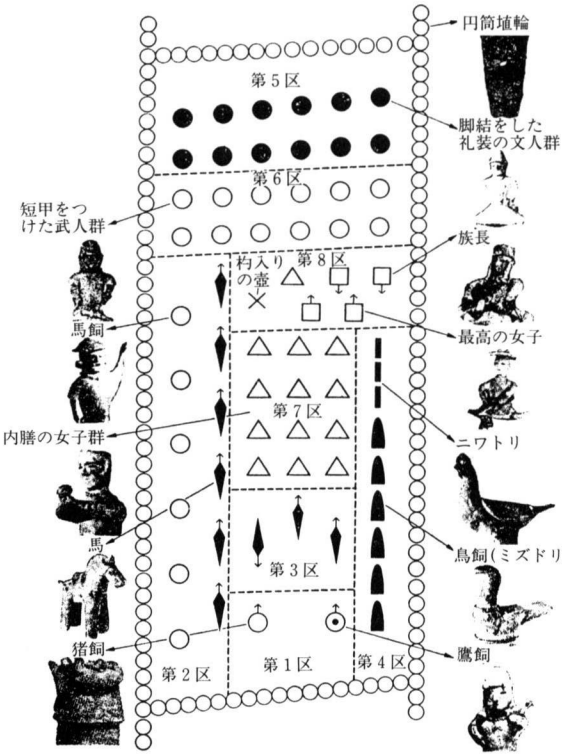

図3　保渡田八幡塚古墳　水野正好「埴輪芸能論」より

人物埴輪は、入り口から順に、鞆を負った男子像数体、胡座した貴人男子像とそれと向かい合った貴人女子像、その後に袋を持った女子像、そしてこれらの脇に三体の女子像、複数の正装男子・武人・農夫像と盾持人という構成である。

三、墳墓の世界と人物埴輪

古墳時代の人々の他界観を知る資料の一つとして、副葬品がある。古墳時代全般を通じての副葬品に、鏡や玉製・金属製・石製の各種装身具類があり、これらはいずれも弥生時代以来の呪術的宝飾的目的を持ってのものであろう。しかし、古墳にはこれ

ら以外に、冠・帯・靴・大刀等被葬者の佩用品と思われるもの、また、大量の鉄鋌や武器・甲冑類、そして工具・農具類、さらには馬具類が埋葬されているのである。

大阪府羽曳野市の応神天皇陵西側の陪塚と考えられているアリ山古墳からは、刀剣・矛・槍・鏃・刀子・斧・鎌・鍬・鑿・錐・鋸等の鉄製品が三〇〇点近くも出土している。[15] また、これに隣接した藤井寺市の墓山古墳の陪塚とされている野中古墳は、一辺三〇メートル余の方墳であるが、この古墳には木箱状のものに納めた形で、一〇数点の甲冑類及び斧・鍬・鋤・鎌・刀子・鏃等の鉄製武器や農具とともに鉄鋌が埋葬されていた。[16] また、奈良県東大寺山古墳からは、大量の鉄製斧・鎌・刀子とともに滑石製の斧・鎌、そして大形鉄鋌二八二枚・小形鉄鋌五九〇枚が出土しており、[17] この他の大阪府や奈良県の古墳からも大量の甲冑や武器・工具類が出土している。このように被葬者の着用とは考え難い大量の甲冑が副葬されていたことに対して、北野氏は、これらの甲冑は本来は多数の第三者の許に個々に所有されていたものを供献したものではないかと解しておられる。[18] 鉄鋌は、朝鮮半島の伽耶・新羅の古墳からも出土しており、[19] 本来は鉄製品の素材であるが、交換価値を持つ貨幣としての性格も持っていた可能性の大きいものである。

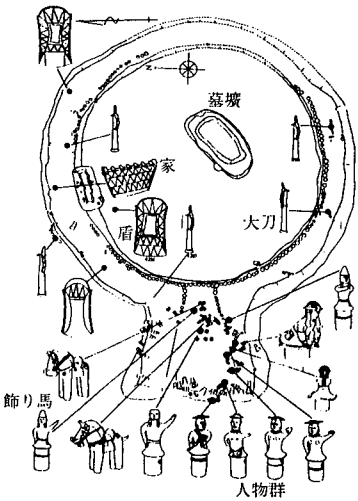

図4　塚廻り四号墳
群馬県立歴史博物館『はにわ－秘められた古代の祭祀』より

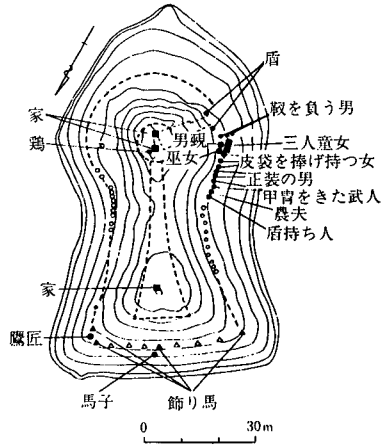

図5　綿貫観音山古墳
群馬県立歴史博物館『はにわ－秘められた古代の祭祀』より

これらの大量の武具や農工具類、そして鉄鋌の副葬は何を意味しているのであろうか。被葬者の権力の誇示ともとれなくはないが、地下の世界に共に埋められていたということは、これらの副葬品は被葬者の死後の世界と関わりを持つ品々と解釈するのが妥当ではなかろうか。即ち、これらは、被葬者が来世で暮らすのに必要と考えられた品物であろう。来世で現世と同様の権力を持ち続けるとしたら、来世でも多くの武人や工人・農民達を抱えることとなり、当然これらの品々は必需品となる。北野氏が述べておられるように、甲冑類が個々の所有者から供献されたものであったとしたら、武器や工具・農具類もその可能性が強く、それぞれの武具や工具の所有者が殉死的意味を持って、自らの霊のこもった品々を供献したとも考えられる。

副葬されている金銅製の冠や靴・帯等の品々も、現世で着用していたものではなく、埋葬用に新たに作られたものである可能性が大きい。靴は藤の木古墳の例をみても、四〇センチ前後と大形であり、福岡大将陣のものになると五〇センチ前後もの大きさである。裏には歩揺がついたものもあり、どう考えても実用のものではない。また、金銅製の冠も現世でも儀礼時等に着用されたとも考えられなくはないが、その後の我が国の位階制における冠や高句麗の古墳壁画にみられる王侯貴族の冠も、また中国の文献に記された朝鮮・日本の権力者達の冠も、いずれも布帛製のものであって、金属製のものではない。これは帯についても同様であって、これら金属製の冠や帯等の副葬品は、いずれも埋葬用に造られた可能性が大きいものである。金属製の冠や帯・靴は来世における権力の表示具として一緒に埋葬されたものではなかろうか。

以上のように、古墳における副葬品は来世における生活を想定してのものと思われるが、当時の人々が墳墓に求めたものを具体的に窺う適切な資料は、残念ながら我が国には見当たらない。従って、我が国の古墳文化の淵源の一つと考えられる朝鮮半島の資料から、朝鮮の人々の墳墓観をみることとする。

高句麗には多くの壁画古墳が存在する。それらの中で被葬者及び年代の明確なものに徳興里古墳があるが、これは五世紀初頭に死去した当時の大臣クラスの人物の墳墓である。この古墳の壁画には、被葬者と思われる像が大きく描かれ、その後に奉仕する人物、そして多数の官吏達、また、この被葬者と思われる人物が中央部分で馬車に乗った形での壮麗な行列図が描写されている。一方には、捧げ物を持つ女性や馬・厩・牛舎、蓋をさしかけられて牛車に乗ろうとしてい

る被葬者と思われる人物と婦人など、生活の種々の場面が描かれている。そして、前室の天井には、狩猟図が描かれ、それとともに飛天・天馬・牽牛・織女・鳳凰等がみえるのである。これらの飛天や飛鳥に乗る神等の図柄は、四世紀末～五世紀初頭の築造と考えられる長川一号墳、舞踊塚古墳、五世紀初頭とされる三室塚古墳、五世紀末の雙楹塚古墳等にもみられる[20]。この種の図像は、恐らく中国の影響によると思われるものであるが、前室の天井等に描かれているということは、この前室より奥の世界は、天界（来世）を意味しているということであろう。即ち、前室や玄室に描かれている様々の壁画は、全て来世における被葬者の生活の種々相を、想像し得る形で描き出したものと思われる。

このように、高句麗古墳に描かれた壁画は、被葬者の来世の姿と考えられるものであるが、残念ながら、我が国に近い新羅・百済・伽耶等の古墳にはこのような壁画がみられない。ただ、南朝鮮の古墳出土の副葬品も、我が国の古墳の副葬品と類似したものが多く、これらの副葬品は我が国の副葬品と同様に、来世での使用の為に埋葬されたものと考えて間違いないと思われる。即ち、当時の日本及び朝鮮の人々の墳墓に求めたものは、中国の人々の求めたものと同様に、死後の世界における幸せな生活であったと考えられるのである。

我が国における形象埴輪の初現は、四世紀後半の前方後円墳の、玄室のある円頂部に立てられた家形埴輪や盾・蓋形埴輪等であった。これは、既に多くの方々が述べておられるように、家形埴輪は被葬者の霊の宿る場所であり、蓋は権威の象徴として、また盾は悪霊等から守護するものとして立てられたものであろう。

その後人物埴輪等が立てられるようになる。初期の人物埴輪は、蕃上山古墳の例にみられるように、手襁を掛けた男女像を含む数体の男女像と甲冑形埴輪であった。そして、その後様々の埴輪群像が出現するのであるが、これらは高句麗古墳壁画で描出された世界を、埴輪で表現したものではなかろうか。高句麗古墳壁画に描かれた来世の生活描写は多方面に亙っている。四世紀半ばの大同江南に位置する丘陵上に作られた安岳三号墳は、雄大豪華な古墳であり、被葬者は王族と考えられている。その壁画図像は、座る主人像と、側にひざまづく家臣達、座る婦人像と侍女達、多数の侍従・武官達、斧・鉞をもった人物、儀仗兵や旗手達、厨房・倉庫・車庫・厩・牛舎等の生活空間図とそこで働く人々、そして仮面の技芸者、ふんどし姿の相撲取り、角笛を吹く人物等である。また、別の壁面には壮麗な大行列図が描かれてい

る。三列の騎馬人物像と徒歩の旗持列を先頭に、中央列には、恐らく被葬者のものと思われる立派な飾り馬とそれをひく人物、その後ろには楽隊、そして重臣と思われる馬上の人物が続き、その後ろに、幌つきの牛車に乗った主人（その服装等全て座る主人像と同じ）、さらにその後を槍や蓋・旗等を持った馬上人物でかため、これらの両脇の列には、徒歩の盾持人と斧・鉞を持つ人々の列、甲冑姿の馬上武人が続くというものである。[21]

これら高句麗古墳に描かれた来世図と、我が国の埴輪群像とは、かなりの部分で重なるのではなかろうか。群馬県の保渡田八幡塚古墳（3図）は、二重の濠を廻らせた関東では大形の前方後円墳であり、恐らく首長層の墓と考えられるものであるが、ここに配列された酒宴場面を中心とした埴輪群像は、被葬者の来世での生活の一部の表現なのではなかろうか。現世での権力相応の姿と思われる。同じ群馬県佐波郡境町の剛志天神山古墳（六世紀前半～中頃）も全長一〇〇メートル前後の前方後円墳であるが、この前方部前面の円筒埴輪列で区画分けされた中に、主人と思われる男性像と手襁をかけた女性像・杯をささげる女性像を中心に、左には琴弾き・太鼓打ち・鼓打ち等の楽人像と弓持人、右には複数の馬と馬飼、これらの後方に女性像・鳥・両方から犬に挟まれた猪という形で埴輪が配列されている。[22]これも、被葬者の来世での生活の一場面であろう。図4の塚廻り四号墳も椅子に座った被葬者と思われる人物像と、彼に向かってひざまづく男子像を中心に、杯を捧げる女性像や踊るしぐさの女性像と飾り馬、馬飼が配され、最前列の大刀を佩びた女性像が、これらを守護すべく立てられている。この古墳は全長二二・五メートルという小規模のものであり、来世の描き方も省略されたものであったのであろう。六世紀後半の高崎の綿貫観音山古墳では、貴人男女像が向かい合った形で表現されているが、この被葬者と思われる男性像は手を合わせている。恐らくこれは合掌した姿であり、これに対するひざまづいた貴人女性像と三人の女性像、そしてその後に控える女性像は、この合掌した被葬者と思われる男性に奉仕している姿であろう。この古墳からは、仏教文化の影響を窺うことの出来る銅製の水瓶や銅鉢が出土しており、この男性の姿を合掌姿として間違いないと思われる。

この他鍬をかつぐ人物像や子守像も来世での生活を支える人々であり、狩猟・踊る人物・楽人達・相撲取り・性器露出像等はいずれも来世での楽しみの姿であろう。[23]人物埴輪とともに置かれた家形埴輪は、森田氏も述べておられるように、屋敷や楼閣であり、来世での住居と思われる。

古墳の被葬者の現世での権力や趣味等により、配置される埴輪像は異なるが、いずれにしてもこれらの形象埴輪は、高句麗壁画の世界を埴輪で表現したものであり、それらは来世での幸福な姿の表現と思われる。笑う人物像の埴輪や、鍬をかつぐ農夫と思われる人物像の笑顔はこのことを裏付けてくれる。

また同様のことは、埴輪人物像の服装からも窺える。まず冠であるが、先にも述べたように、当時の冠は布帛製の可能性が大きく、明らかに金属製と思われる冠は埋葬用即ち、来世用のものと考えられる。従って、埴輪の中で明らかに金属製の冠をかぶったと思われる人物は被葬者である可能性が大きく、現世の姿ではない。また、男女像とも手襁を掛けた像があるが、女性像には鏡を身につけたり、肩から斜めに布を掛けたりした姿のものも多く、これらは一般的には巫女と解釈されている。しかし、果してこれらの女性像は巫女なのであろうか。『日本書紀』天武天皇十一年（六八二）三月条に、

膳夫采女等之手繦肩巾、肩巾、此云比例。並莫レ服。

の如く、膳夫采女の手襁を禁止しており、この頃まで手襁は、膳夫や采女が掛けていたことが窺える。大殿祭の祝詞にも、

皇御孫命、朝乃御膳、夕乃御膳供奉流、比禮懸伴緒、襁懸伴緒乎。

（皇御孫命の朝の御膳・夕べの御膳に供へまつる領巾懸くる伴の緒、襁懸くる伴の緒を）（『祝詞』[24]）

の如くあり、御膳を奉仕する人々が手襁を掛けている。天武天皇の手襁禁止令は、唐風化をめざしての旧制度廃止の一環として出されたものであり、また、祝詞も伝統的なものを継承していると思われるもので、これら膳夫・采女等が手襁を掛けて奉仕するのは、恐らく古来からの風習の一つであろう。

手襁をかける目的であるが、『日本書紀』允恭天皇条に、氏姓が乱れていたので盟神探湯をさせることが記されており、

於是、諸人各著二木綿手襁一、而赴レ釜探湯。（四年九月条）

の如く、神意を伺う行為である盟神探湯は、木綿手襁を掛けて行われている。また、祈念祭の祝詞でも、

辭別、忌部能弱肩爾、太多須支取挂弖、持由麻波利仕奉禮留幣帛乎

（こと別きて、忌部の弱肩に、太手襁取り掛けて、持ち斎はり仕へまつれる幣帛を）（『祝詞』）

と、忌部が幣帛を清めるに当たって手襁を掛けており、『万葉集』[25]においても、

大船之　思馮而　…　木綿手次　肩荷取懸　忌戸乎齋穿居　玄黄之　神祇二衣吾祈　甚毛爲便無見（三二八八）

（大船の　思ひたのみて　…　木綿手襁肩に取り懸け　斎瓮を　斎ひ掘り据え　天地の　神祇にそわが祈む　甚の為方無み）

のように、神に祈る時に手襁を掛けている。このように、手襁は掛けることにより神聖な身体になるというものであり、その材料が木綿であればよりその効果も大きいということであろう。

以上述べて来たように、埴輪にみられる手襁を掛けた姿を、巫人とのみ解釈することは危険である。むしろ、来世で神聖な身となった被葬者に、食事等を奉仕する人々の姿なのではなかろうか。鏡を掛けているのも、その意味でのものと思われる。もしこれらの人物が巫人であったとすると、必ず頭部に髪を装うのではなかろうか。『古事記』上巻にみられる天宇受売命も、

天宇受賣命、手二次繫天香山之日影一而、爲レ縵二天之眞折一而、　（天照大神と須佐之男命条）

の如く、手襁とともに髪を掛けて神懸かりしている。これは今日まで、沖縄等の巫女にも伝わるものであり、神懸かりの象徴となる頭部に、巫人が特別に何も装っていないということは考え難い。

巫女とされている埴輪女性像の多くは、肩から斜めに布を掛けており、これを襲（おすひ）と解釈している人も多い。[26]襲は『古事記』によれば男性も掛けている。にもかかわらず、埴輪男性像にはこの姿は皆無である。また、少し時代が下がるが、『延喜式』[27]巻四伊勢太神宮の太神宮装束条に、襲の用尺が記されている。

帛意須比八條、長二丈五尺、廣二幅。

これからすると、襲は長さが二丈五尺（約七・五メートル）・幅が二幅（約一・三二メートル）という長大なものである。これは伊勢神宮の神事のものであり、時代の流れとともに誇張されたとも考えられなくは無いが、埴輪女子像に見られるものとあまりにも差が大きすぎるのではなかろうか。丈を半分にして装っても相当の長さとなり、埴輪の姿とは遠いものである。

従って、埴輪女子像の布状のものが、どのような装いなのかは不明であり、この装いを巫女の象徴とする根拠もない。

また、貴人男子像の多くは、手甲と足結をしている。足結は、日常的にしているものではなく、戦いや旅に出る時にするものであることは、『日本書紀』の次の記述により明らかである。

大臣出二立於庭一、索脚帯、時大臣妻、持二来脚帯一、愴矣傷懐而歌曰、

飫瀰能古簸　多倍能波伽摩鳴　那々陸鳴純　儛播儛陀々始諦　阿遙此那陀須暮

（臣の子は　栲の袴を　七重をし　庭に立して　脚帯撫だすも）　（雄略天皇即位前紀）

安康天皇を殺した王をかくまった為に、大臣宅が雄略天皇の兵に囲まれてしまった。そこで、大臣は妻に足結を持ってこさせ、袴を畳んで足結し武装を整えたというものである。

このように、歩行に便利というだけではなく、支度を整えるという意味で足結をするのである。手甲については、その用途に関する資料が見当たらないが、後世の使用方法からするとやはり旅や戦さ等の身支度としてのものであろう。即ち、手甲と足結の姿は、非日常の世界を表現しているのであり、これはやはり来世への旅立ちの姿ではなかろうか。即ち、被葬者や侍臣達は、現世から旅立って行くのであり、彼等の装いはその姿を表現しているものと思われる。一方でまた、埴輪人物像は、馬子とか鍬をかつぐ男等身分の低そうな人物まで、首飾りや耳飾りをしている。当時ガラス製装身具類がかなり供給されていたとしても、このような階層にまで普及していたとは考えられない。おそらく、彼等も、来世での使用人の姿であろう。

以上のように、人物埴輪等の配列は従来から主張されているように葬送儀礼と関わったものではなく、来世の生活場面の種々相を表現していると思われるのであるが、これは、梅沢氏の見解に通じるものである。しかし、この説に対しては、被葬者とともに地下に埋葬すべきであろうとの批判が当然生じるであろう。確かに、始皇帝の兵馬俑を始めとして、中国では古墳に各種の俑を副葬しているし、百済や新羅の古墳にも小形の陶俑等が副葬されている。これらの俑が被葬者の地下世界（来世）での生活と関わりを持ったものであることは間違いないであろう。

では、我が国で墳墓の外にその世界を描出したのはなぜであろうか。勿論玄室内に壁画の描かれている古墳も存在するが、具象的なものは非常に少なく、玄室内には何も描かれないか、もしくは描かれたとしても幾何学的模様が多い。

これは新羅や百済古墳でも言えることであり、中国の影響を濃厚に受けた高句麗古墳との違いであろう。

我が国の古墳の多くは、濠に囲まれている。この水の彼方の墳墓は、玄室等の地下世界だけでなく、その墳丘全体で他界を意味していたのではなかろうか。そこは、庭園の池中の蓬莱島と同様の意味を持った場所とみなされたと考えられるのである。古墳に立てられていた鳥や蓋・盾形等の木製品も彼岸世界の荘厳表現の道具だったのではなかろうか。大阪府津堂の城山古墳の濠の中の島近くには、実物大の白鳥と思われる鳥形埴輪が三羽立てられていたし、同様の鳥形埴輪は応神天皇陵にも立てられており、天界の使者である霊鳥の遊ぶ姿を表現しているものと思われる。

この周濠に立てられた白鳥に関しては、一般的には、『日本書紀』仲哀天皇元年条の記述との関わりで説明されている。しかしこの倭建命陵に、命を偲ぶ目的で白鳥を放ったという記述の信憑性には問題がある。この記述は、天皇の命によって越国の人が献上しようとした白鳥を天皇の異母弟の王が奪ってしまうという、謀反事件の導入として記されているものであって事実かどうか疑わしい。たとえもし、このことが事実であり、これ以降白鳥を陵の池に放すことが慣例となったとしても、それは生きた鳥を放せば良いことであって、人工的に白鳥を造って立てる必然性は無いのではなかろうか。

当時の人々が、池に囲まれた墳墓そのものを他界とし、そこに霊が存在していると考えていたことは、『古事記』の次の記述からも窺える。

天皇、深怨下殺二其父王一之大長谷天皇上、欲レ報二其霊一、故、欲レ毀二其大長谷天皇之御陵一而、遣レ人之時。

（下巻　顕宗天皇御陵の土条）

顕宗天皇は、父王を殺した雄略天皇を恨んで、その霊に報復する為に雄略天皇陵を壊そうとしたというものであり、陵そのものが霊と関わったものであると考えていたことが窺える。

四、おわりに

『日本書紀』垂仁天皇条の埴輪の起源に関する記述は、

二十八年十一月、…葬二倭彦命于身狭桃花鳥坂一、於是、集二近習者一、悉生而埋二立於陵域一、數レ日不レ死、晝夜泣吟、

遂死而爛薨之、犬烏聚噉焉、天皇聞二此泣吟之聲一、心有二悲傷一。

三十二年秋七月、皇后日葉酢媛命薨、…於是、野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋二立生人一、是不良也、…自領二土部等一、取レ埴以造二作人・馬及種々物形一、獻二于天皇一曰、自レ今以後、以二是土物一更二易生人一、樹二於陵墓一、爲二後葉之法則一、…則其土物、始立二于日葉酢媛命之墓一、仍號二是土物一謂二埴輪一、亦名二立物一也。

の如くであり、近習の者を生きながら陵域に埋め立てたと記している。そして、数日を経ても死なず、昼夜泣吟する声が天皇の耳にも聞こえ、しかも死ぬと、犬や烏が集まって食べたということである。この記述から、この頃の殉死は、他国にみられるように、亡くなった主人とともに地下に埋葬するという形ではなく、墳丘の周りに埋め立てるという形で行われていたことがわかる。泣き声が聞こえるということ、そして「埋め立てる」という表現は、上半身がある程度以上地表に出た形で埋められていたということを意味しているであろう。

なぜ我が国でこのような殉死の形態がとられたかについては、その根拠となる資料も無いので明らかにすることは出来ないが、殉死そのものの目的は、他国と同様に被葬者の来世での生活の為であろう。そして、地表に埋め立てたのは、恐らくは被葬者の権力の誇示と霊の守護が目的と思われる。先にみたように、濠に囲まれた墳丘そのものが被葬者の霊の宿る空間であり、彼岸の世界であれば、この墳丘の周りに近習者を埋め立てることも当然であろう。

人物埴輪の起源論の一つとして古くから主張されていたのが、この『日本書紀』の記述に基づいた殉死代用説であるが、はじめに記したように、現在では否定的見解が有力となっている。この論拠の一つとしては、日葉酢媛命陵と目されている左紀陵山古墳には人物埴輪がみられないことが挙げられているが、この左紀陵山古墳が日葉酢媛命陵である確証はない。また二つ目の批判として、人物埴輪に先行して家形埴輪や盾形埴輪が立てられていたということがあるが、家形埴輪や盾形埴輪と人物埴輪は別系統のものと考えられるのである。家形・盾形埴輪は玄室のある墳頂部に立てられたものであり、これは先に記したように、被葬者の霊の宿る場所及びその守護としてのものであろう。しかし、人物埴輪は、墳頂部に立てられることはなく、墳丘の周辺部に立てられているのである。墳頂部の家や盾形埴輪等と、人物埴輪を一くくりにして考えるところに問題があるのではなかろうか。もう一つの否定的根拠となっているのが、蕃上山古墳等に立てられた人物埴輪の初現とみなされている像が、近習者像ではなくて巫人像であるというものである。しかし

これも既にみたように、手襁を掛けたり斜めに布を掛けたりした人物が、はたして巫人と言えるのかどうか大いに問題がある。蕃上山古墳の埴輪人物像は、近習者達の可能性もあり、その姿は、かって生きたまま埋め立てられた人々に代わるものである可能性が大きいのではなかろうか。

この垂仁天皇紀の記述がそのまま史実でないにしても、書紀の編纂時に参考にした原史料には、この記述がなされていたということは間違いないであろう。それは土師部の家伝的なものであったかも知れないし、また、それがいつの時代であったかの特定もできないが、人物埴輪誕生に関してはこのような言い伝えがあったことは確かと思われる。垂仁天皇の時代にはまだ人物埴輪が出現していないとか、初期人物埴輪を巫人達と断定する等の不確定要素でもって、一つの重要な史料を抹殺することの危険性の方が大きいのではなかろうか。

初期段階の人物埴輪は、書紀の記述通りに、殉死の代用として近習者の人像を立てた可能性が大きいと思われる。そしてこの風習が一般的になると、初期の近習者だけを供に連れて行くという目的は薄らぎ、来世での華やかな生活の為に、より多くのまた様々の職業や階層の人々を伴うということに拡大してゆき、それを埴輪で表現したのではなかろうか。朝鮮半島からの移住者も多く、高句麗古墳壁画等に描き出された来世での生活観の影響も加わり、人物埴輪の世界は膨らんでいったと考えられるのである。

註

(1) 若松良一「埴輪群像が語るもの」(『はにわ―秘められた古代の祭祀―』群馬県立歴史博物館) 一九九三年、二四～二五頁。亀井正道「人物・動物埴輪」(『日本の美術』三四六号、至文堂) 一九九五年、二一頁等。

(2) 本論引用の『古事記』は全て日本古典文学大系本 (岩波書店) を使用。

(3) 本論引用の『日本書紀』は全て日本古典文学大系本 (岩波書店) を使用。

(4) 水野正好「埴輪芸能論」(『古代の日本』2、角川書店) 一九七一年、二五五～二七八頁。

(5) 滝口宏「はにわについて」(『芝山はにわ博物館』) 一一頁。大場磐雄「葬制の変遷」(『古代の日本』2、角川書店) 一七〇頁。

(6) 和田萃「古代の葬送儀礼と埴輪群像」(『はにわ―秘められた古代の祭祀―』群馬県立歴史博物館) 一四頁。

(7) 森田悌「埴輪の祭り」(『風俗』一二二号、日本風俗史学会) 一九九五年、一二～二一頁。
(8) 梅沢重昭「群馬の埴輪－古墳の変遷とその埴輪祭式－」(『はにわ－秘められた古代の祭祀－』群馬県立歴史博物館) 三〇頁。
(9) 三輪嘉六・宮本長二郎「家形はにわ」(『日本の美術』三四八号、至文堂) 一九九五年、一九頁。
(10) 鶏形埴輪と目されているものの中には、冠や尾・首の形等から鳳凰ではないかと考えられるものもある。
(11) 望月幹夫「器財はにわ」(『日本の美術』三四七号、至文堂) 一九九五年、一九～二〇頁。
(12) 高野学「古墳をめぐる木製樹物」(『季刊考古学』二〇号、雄山閣) 一九八七年、五〇～五二頁。
(13) 亀井正道「人物・動物埴輪」二〇頁。
(14) 亀井正道「人物・動物埴輪」六〇頁。
(15) 村井嵓雄「古墳」(『日本の美術』五七号、至文堂) 一九七一年、四二頁。
(16) 北野耕平「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」(『日本考古学論集』8、吉川弘文館) 一九八七年、一八六～一八七頁。
(17) 村井嵓雄「古墳」四二頁。
(18) 北野耕平「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」一九二～一九三頁。
(19) 『よみがえる古代王国－伽耶文化展』(東京国立博物館) 一九九二年、一三九頁。
(20) 朝鮮画報出版部局編『高句麗古墳壁画』(朝鮮画報社) 一九八五年。
(21) 朝鮮画報出版部局編『高句麗古墳壁画』。
(22) 『はにわ－秘められた古代の祭祀－』群馬県立歴史博物館、五四頁。
(23) 森田悌「埴輪の祭り」一二～二一頁。
(24) 本論の『祝詞』は全て日本古典文学大系本（岩波書店）を使用。
(25) 本論の『万葉集』は全て日本古典文学大系本（岩波書店）を使用。
(26) 辰巳和弘「生活　1衣服」(『古墳時代の研究』3、雄山閣) 一九九一年、三二頁。亀井正道「人物・動物埴輪」二二頁等。
(27) 本論の『延喜式』は全て国史大系本（吉川弘文館）を使用。

（ますだ　よしこ　本学教授）